

ある人世界漫遊の途に上りたりしが、今や歸朝の期近づけりと假定せんに。其人の長子は父の歸宅を喜べども自ら手に受くるまでは土産を得んことを信せず。次子は父が愛と財力とを以てせば其好みあるものを必ず持歸るべきを信じ、土産を見ざる前に土産を受けたる心地せり。思ふに長子は現金主義の人にして、次子は信仰の人なり。

ある病者は其病氣の癒やさるゝを實驗するにあらずば神の令旨を信する能はず。他の一人は病の癒やされざる以前、已に病の癒えたることを信せり。否病の先づ癒ゆるを信するにあらず、神の愛と能とを先づ信じ、其結果として病の癒やさるべきをも信するなり。

日本譯馬可傳第十一章二十四節に曰く、凡を祈禱の時その求ふ所のものは必ず得べしと信せば必ず得べしと。今之を英語改正譯及ピロソルハム譯並に二十世紀聖書に照すに、凡を祈禱の時その求ふ所の

ものは已に得たりと信せば必ず得べしと訂正せられ、いづれも過去詞を用ゐたり。此意義よりいへば已に得たりと信じて後與へらるゝなり。さればなんぢの信仰爾を救へりとの主の言を聞く時、其身は實際健全に復したるにはあらずれども、其言を聞きたる時、其病は癒えたりと信するなり。されば病の癒えざる前に癒えたるを信じ、將來のことを過去の事實として感謝す、是れ其人の信仰なり。

第四節 病氣の容易に癒やされざるは何の

爲か

第一項 熱心神に頼らしめん爲

病者が名醫にかゝり、良薬を飲み、滋養物を食し、ある限りの方法を盡して静養すれども病の容易に癒えざることあり。これ神吾人を捨て

給ひたる爲か否々これ却つて吾人を祝し給ふものなり。
 人一度病氣に罹れば熱心神を頼るに至る。苦い時の神頼みとは空言
 にあらず。病氣は吾人をして神によらしむるものはなし。且病氣
 長びき且重くなるに従ひ、彌々朝夕神にすがり、刻々神に祈りて神よ我
 を扶けたまへとの言をやめず、其心は確と神に抱つき、夢寐にも神に依
 頼するなり。此精神は幸福と元氣の原因なれば神は此幸福元氣を與
 へんとして吾人の病氣を容易に癒やし給はず。故に神が長く病氣の
 裡に置き給ふは其實吾人を捨て給ひしにあらずして、吾人を祝福して
 己に頼らしめん爲なり。吾人宜しく此聖旨を奉體せざるべからざる
 也。

第二項 感謝の念を大ならしめん爲

病者が少量の薬を用ゐ、數日臥牀し、僅かの苦痛にて癒ゆれば、是れ神
 の豊かなる祝福、彼の上に加はりたるものなるが故に、其心に感恩の念
 大ならん。されども實際は然らずして、感謝の念に満つるもの少し。
 之に反し、病氣容易に癒えず、良醫良薬を求め、時と金とを糜して、多年
 苦痛の間に呻吟すれども、其效なく、専心神に祈り求め、長く忍耐したる
 後、癒やさるるに當りては、吾人の心實に感謝の念に溢れん。此感恩の
 念は宗教の發點なり、人性の美德なり、神は此美德を完からしめん爲に
 吾人の病を容易に癒やし給はざるなり。

第三項 無益の枝を剪除らん爲

菊の芽を摘むは其花をして大ならしめ、葡萄の枝を剪除るは其實を
 立派ならしめん爲なり。神は大に吾人を祝せん爲に病氣を長びかし、

以て吾人の無益なる枝を剪除り給ふ。吾人は長病の爲に、此世の名譽を夢の如く、黄金白銀を幻の如く、社會の大事業を石鹼玉の如く了悟するに至る。神は吾人の小なる思想を奪ひ、低き希望を消し、愚なる行爲を取り去り、吾人をして美しき花を開き立派なる實を結ばしめ給ふ。然り、神は吾人をして薰香ばしき華麗なる花たらしめ、成熟したる味よき實たらしめ、爲に吾人に苦痛を興へ、長く病氣の内に置き給ふなり。

第四項 鍛錬せん爲

第四は吾人を鍛錬せん爲なり。

トロツク博士は其身體と精神とに大なる悲痛を感じ、後には兩眼を亡び、遂に教授の職さへ抛たざるを得ざるに至れり。然るに之が爲に彼の心靈は大なる鍛錬を受け、靈界の新事實を見るの眼、新たに開け有

益なる書を著はし、人をして天來の福音を聽かしめたり。是れ彼は病氣によりて鍛錬したるによる也。

それ金は火に投せられて純粹となり、鐵は鍛錬せられて名刀となる。神は吾人をして名刀たらしめ、純金たらしめ、爲に病氣を容易に癒やし給はず。されば吾人の病久しく全快せざるは、吾人を鍛錬せしめん爲なり。

第五節 病の癒やさるゝ祈禱

予は一度不治の病患に胃されてより、家族、親戚、朋友は勿論、特に當時予の牧したりし明石教會は、連朝連夜の祈禱會をさへ開きて、予が全癒を切に神に求めたり。然るに明治三十二年病氣再發以來、今日に至る迄八年間、時々堪へ難きの發熱あり、咯血ありて、中々癒ゆる模様なし。

お、神は予を棄て給ひたるにあらざる乎、神其耳を掩ひて予等の祈を
聴き給はざるにはあらざる乎。否、否、神は已に我等の祈を聴き、其求
めに應じ給へり。今左に其理由を述べん。

神は恒に吾人が祈禱の言に聴き給はずして其主旨、精神に聴き給へ
り。モニカは其放蕩兒アウガスチンの悔改せん爲に腐敗せる羅馬に
至らざらん事を祈れり。然るに其祈禱は聴かれず、却つて羅馬に往く
事となれり。而も之が爲に彼はミランの監督アンブローズに遭ひ其
教導によりて遂に悔改したりき。ジヨルジ、ミユールは信徒となり
たる當時より八年間、印度に宣教師たらん事を求めたり。然るに神は
其求を納れず、彼を撰びて英國に於て孤兒院を開かしめ、大事業を遂げ
しめ給へり。然るに其後三十七年を経て、其大事業の内に現はれ給へ
る活ける神を傳ふる爲に印度のみならず、世界を廻る事十有餘回、曾て

求めたる宣教師たるの業よりも、一層廣き福音宣傳の大業をなし、全世
界の渴したる靈魂に活ける水を飲ましめたり。神は祈禱の言に聴か
ずして其精神に聴き給へり。然り予も其病氣の癒えん事を祈るは唯
長壽を欲するが爲にあらず、安逸を望むが爲にあらず、子孫の行末を見
ん爲にあらず、専ら神の榮と人の幸福の爲に自由に働き得る身體を得
ん爲なりき。もし此主旨を成就し能はずば、予世にあるも何の益あら
んや、健全に復するも何の功あらんや、唯それ神と人との爲に働きて始
めて生き甲斐あり。此目的の爲ならずば予輩は決して癒やさるゝ爲
に祈禱するの要なし。

而るに神は予の病中却つて予に其顔を現はし、其聲を聴かし、其手を
按け、其腕に抱き、其懷に温め給へり。予は此榮光を辱ふしたるが故
に、曾て健全なりし時よりも尙明白に神の愛、神の能を他に示し得るに

至れり。
予の病氣の癒やされんことを祈りたるは此榮光ある業を成就せん爲なり。予は今病にあれども神は予輩の禱に聽き、已に其應答を與へ給へり。思ふてこゝに至れば予は實に感謝に堪へざらんや。

第六節 病氣の聖化

病氣は種々なる原因より來る。遺傳又は傳染又は不衛生よりするあり、其他不注意より、氣候變遷より等極めて多し、而も其何れより來りたるにせよ、此は悉く思ひべく厭ふべきものはあらず。されども神を信するものは其病氣を聖化することを得。これ恰かも金線が電氣に接すれば光明を放ち、葉末の露が天來の光に照さるれば玉と化するが如し。神に倚れるもの、病は神の榮となり、自らの救となり、人の幸福となる。

されば病氣は吾人の仇敵の如くにして實は吾人の朋友なり。吾人神を信するもの何ぞ病氣を懼るゝを要せんや。

第七節 神の愛子も病む事あり

病は神の好まざる者のみならず、其愛子も患ふ。ラザロは主の愛する者なりき、約翰十一〇三、されども彼は大患に苦み、危篤に迫りたり。時にキリストはヨルダン河の外にありて、傳道に従事し給へり。ラザロの姉妹等は其許に主の愛する者病めりと言遣せり、姉妹等はキリスト彼を愛し給ふが故に直にベタニヤに來り給ふならんと思ひしに、却つて二日も滯留し、而して後緩々發足し給へり。さて主のベタニヤに着き給へる時ラザロは既に死して四日を経たり。キリストが訪ふの遅かりしは其温情變じて冷淡となりしが爲か、否、然らず、實は尙厚き愛

を注ぎ給はんとて也。視よキリストがラザロの墓場に來り熱愛の涙を拂ひつゝ死せる彼を復生なさしめし時、彼は之が爲にキリストに對して一層大なる感謝の念を増し、彌々キリストに親み、其家族郷人は益々神の徳と能とを讃めたりき。彼は神の榮の爲に用ゐられ、病めることによりて此榮譽を擔ひたり。

病氣は實に辛し、されども此れ神の與へ給ふ愛の鞭なり。もし親にして其子を鞭つことなくんば、神も吾人に病氣を與へ給ふ事なきやも知れず。されども親にして、時に其子を懲すことありとすれば、神も吾人に病氣を與へ給ふは不思議にあらす、病氣は此れ神が吾人の父にして吾人は其子たるの印、吾人を愛し給ふの證なり。

第八節 病者の幸福

第一項 吾人の弱小と神の強大

人もし目を病めば、長閑なる春の朝、花園に遊ぶことも笑める花を楽しむ能はず。氣澄める仲秋の夕、明月に對すれども、其美を歌ふ能はず。己が傍なる妻子の顔も見る能はず。もし耳を患へば、鳥樹間に囀れども、其妙音を聞く能はず。虫叢に鳴けども、其美聲を知る能はず。音樂會に列れども、天來の音調を味ふ能はず。其他一指を損するも、業を休まざるべからず。一足を傷くるも、職を廢せざるべからず。人は其身の一小部分を病むも、尙外界との關係を絶たざるを得ざるに至る。況んや病膏肓に入りて、重要な機關たる肺臓に迫まられ、心臓に喰込され、頭腦に攻來らるるに於てをや。思へば人は實に弱きものなり。病輕ければ醫藥も効能あるべし。されども其重きに至りては、中々に効果

見えす。

吾人は自己の弱さを知ると俱に、神の強さを知るに至る。吾人に生命を興へ、又之を奪ふものは神なり。吾人に長壽を賜はり、又短命に終らしむるものは神なり、あゝたゞ神のみ。此眞理を教ふるものの一は、確かに病氣なるべし。斯く思へば病氣も亦福ならずや。

第二項 心靈の健康

神は身體の福を奪ひて心靈の福を興へ、身體の健康を取去りて心靈の健康を賜ふ。ロヨラは齡三十の時、戰場に於て右足を傷けられしと同時、左足にも大負傷を受け、久く病瘵に苦みけるが、其間に沈思冥想し、遂に悔改して一身を神に獻げ、後に耶蘇協會を創設し、東洋傳道の基を開くに至れり。然らば日本の傳道はロヨラの病氣に起因せりと云

ふも敢て過言にあらず。又フランシス、ウヰラルドは芳紀未だ十九、紅顔花の如き頃、一朝腸窒扶斯病の胃す所となり、暗黒の雲其身を覆ひて生命旦夕に迫りたり。然るに彼女の靈魂は此によりて蘇生し、新人となり、千載不磨の功績を世に存したり。ジョン、ウエスレーも若年の頃、身心過勞の爲に病に罹り、遂に吐血するに至れり、然れども此によりて彼は永遠不朽のものを望み、世の爲に盡さんとの新なる至誠熱情を獲、天業の基を堅めたり。ジョルジ、ミユイラルも病に苦みて、自の罪の廣大なるを、細大洩さず神に祈るの精神を獲、孤兒院事業の模範を天下に示せり。其他チャーモルス博士、聖フランシスの如きも、皆病によりて心服新しく開かれ、別人となれり。世には病によりて救に預り、恩を得、神を敬し、人を愛するの生涯に入りしもの、其例數ふるに遑あらず。復世には劇烈なる病によらざれば、其心眼開けず、神の愛に接する能はず。

救に預る能はざるもの多々之あり予の如きも其一人なり。神斯く思召たるが故に予に此苦き病氣を賜はりたるならんと予は確信す。予は幸にも此病氣によりて神を知り人を知り神の愛に接し人の至情に接し新天地を見ることを得たり。天地は變らずされども予の眼には新になれり。神は心より人をなやまし、かつ苦め給ふにあらざる哀歌三〇三三神は實に大なる恩を與へんとして小なる恩を奪ひ貴き賜物を賜はらんとして賤き賜物を取給ふなり。乃ち吾人に心靈の健康を與へん爲に身體の健康を取り去り給ふ。病氣によりて此大なる恩貴き賜物の降るとせば、牀に難む者も亦福ならずや。

第三項 心の自由

予の同志社神學校を出づるや、最初に越後の新發田に傳道し、後播州

の明石に轉せり。予は一講義所、一教會に牧師たるの榮職を奉じ、數多の生靈を託せられたるが爲に其全身を捧て日夜に勤たり。然るに一朝病魔に冒され牧職を辭するに及ては一教會の爲よりも組合全教會の爲に盡さんとの希望を起すに至れり。管に組合教會の爲のみならず、新教派全體の爲に働かんとするの念を發するに至れり。否、管に新教徒の爲のみならず、舊教徒の爲にも益を圖らんとするの願を有するに至れり。否、管に全基督教徒のみならず、日本全國民の爲、現今のみならず、將來の我國民の爲、又管に日本のみならず、朝鮮、支那、露西亞の諸國民の爲、否、世界萬民の爲、今日生けるもの、爲のみならず、將來生れんとする萬民の爲に盡さんとするの壯圖は勃々として予の小さき胸中にも興起し來れり。然も予は病聲に臥せるが故に何もなす能はざるが如し。されども病者には病者相當の働をなし得べし。予が著作をな

すも之が爲なり、一文を草するも之が爲なり。斯く予の身は不自由となれども、予の心はいよ／＼自由となれり。

又予の心は過去の偉人に語るの自由を得たり。予は好んでブルックスや、ピーチャヤ、スボルジョンや、ロポルトソン、チャニング、ウエスレー、アウガスタン、ミエーラル等の著書を読むを樂む。予は彼等の書を通じて今日天國にある彼等とキリストの膝下に交通するを感ず。予の病氣は現世と來世との區別を薄からしめ、現世を來世に接せしめ、彼等と交通するの道新に開けたるの心地す。彼等は今日キリストの座前にあり、予も亦其座に於て彼等と兄弟たる交際をなし、古來の聖徒の末席を汚すの一員たることを認むることを得たり。予は病囚となりて以來身は一室に坐し、足は明石の浦邊を出でず、これども心は古今將來及び萬國に通じ、天地宇宙に逍遙するを覺ゆ。

予始め病氣に罹りし際には心悲痛に堪へざりしが、今日となりては之を哀む能はず。神は病氣の苦痛に勝る幸福を與へ給へり、心の自由是なり。あゝ神の攝理も妙なる哉。

第四項 神恩に感激す

人病に悩むに方りては山海の珍味を味ふ能はざるのみか、此を見るさへ嘔吐を催ふし。綺羅錦繡を著ふるも身に纏ふ能はず。金殿玉樓に住まへども樂む能はず。古今の名著傑作を萃ひれ共讀む能はず。馬車あれども出づる能はず、自轉車あれども乗る能はず、晴天も晴天の如くならず、涼風も涼風の如く感ぜられず、たい苦中に呻吟するのみ。されども一朝病氣癒ゆるに至りては粗食も舌鼓ならして味ひ、粗衣にも満足し、數冊の書籍もよく用ゐ、馬車、自轉車なくとも徒歩して樂むこ

とを得るなり。人一度病氣に難みて後、愈やさるれば感謝の情其衷に満つるに至る。嘗に之のみならず病少しく怠りたるに方りても大なる感謝あるなり。

予病に苦みて一室を出づる能はざりし時は、室内より漸く人丸の山を望み、海濱の松を眺め、或は友人の訪問を受けて氣を散するのみなりしに、少しく快方に向ひ、自ら杖によりて歩行し、海濱に遊び、或は友人の家を訪ふに及びては感謝の涙予が袖を濡はす。身、松間におり、水邊にある、是れ予の大なる感謝なるなり。

明治三十四年一月、予は平生の宿痾に加へて流行寒胃を疾ひたるが、二日半間食物は咽喉を下らず、牀上に輾轉反側して苦痛比すべきものなかりき。然るに其月の二十日、朝目覺めたるに病勢僅かに退きたれば、頭を掻げ、口を嗽ぎ、顔を拭ひ、起て漸く火爐に倚りたるに、我前には牛

乳とパンの盆に載せたるがあり、予は之を見るとき俱に眼を閉ぢ、謹みて天父の前に感謝せり、曰く「前二日間は食事どころではなかりしに、今朝は幸に起き出づるを得、食慾もやゝ復し、且予に適當なる食物を我前に置かれたり、爾の深き愛を感謝す」と、其時涙湧き出で、堰止むる能はざりき。其後予が食事に對するの觀念は一變せり。從來は日々食卓に坐して三度食事するは當然なるものの如く、念ひ箸を執る前に感謝の祈禱はすれども、口に言ひ馴れたるものを繰返すに過ぎざりき。然るに此事ありてより以來、予は目前に陳ねられたる物は如何なる粗食なりとも予の身を養ひ給ふ神の賜物なるを念ひ、且予が病床に於てにあらず、食卓に坐して食し得るを念ひ、感謝の念新になりしを覺ゆ。食物を興へらるゝも神の恵なり、之を味ふ食慾を賜はるは之に勝るの恵なり。予は流行寒胃の苦を嘗めて食事に對する感謝の念を増し

たり、予は毎日感謝の念に溢るるなり。

又明治三十七年一月病勢頓に進み咯血大に、熱度高き上に盗汗甚だしく、夜間の如きは蒲團も枕も水に漬したる如く、手拭は絞らざるを得ず、寝衣などは一夜の間に着更ふること幾枚なるを知らず、目覚める毎に濡なす汗を覺ゆる其心地のあしさは得も言はれざりき。然るに一夕其病少しく快く、夜間目覺むるも汗を覺ぬず、身はさらくとして非常に心地よかりければ、予は思はず、昨夜までは大に苦みたりしが今夜は熱を發せず、汗を覺えず、心地よく眠り得るを感謝す、嗚呼感謝すと、其後は毎夜目覺むる毎に感謝胸に滿ち、喜悅心に溢る、予の安眠し得るは是れ大なる感謝なり。予は毎夕感謝に滿ちて曉を迎ふ、旦にも夕にも晝も夜も感謝に溢る、身となれり。予の病氣は未だ全快せず、されども予は感謝せざるを得ざるなり、無限の感謝は予の心に湧く。予が過

去の生涯中今日ほど感謝多き時はあらず。予は實に神恩に感激す。

第五項 健康者の幸福を知る

病者一室に蟄居し、床上に仰臥し、兩便より食事に至るまで、人手を要する時は不自由を感ずること甚し。されども健康者は自由に起き、軽く働き、進退走行實に自在なり、あゝ健康者は福なる哉。人病に罹りて初めて健康者の福をしのぶ。然も健康者は其福を感ずる者衆からず。時には「我に嗜好の食物なく、我に壯大の邸宅なく、我に美麗なる衣なし」と不満を抱き、不平を鳴すことあり。然し汝健康者よ、汝は誠に福なるものなり、汝が有する健康は是れ天の汝に降し給へる大なる祝福にあらずや。汝其健康の身を擧げて勇ましく神と人との爲に働くべきにあらずや。

第六項 同情の價值を知る

同情は吾人をして長閑なる彌生の春の如き感を懐かしめ。不情は
滿目凄然たる木枯の冬の如き思をなましむ。前者は人を生かし、後者
は人を殺す。

同志社の一教授たりし予が一友嘗て病に罹り、數箇月間須磨の海濱
に保養せり。彼一日予が寓居を訪ふて曰く予が今病苦の内にあるを
これまで共に食し、共に遊び、共に學び、親しく交りたる我友の中にも全
く知らざる如く、聞かざる如くするものあり。然るに他方には、これま
で論難争議を試みたる友にして遠路わざわざ訪ひ來り、我を慰むるも
のあり。予は此る人に遇ふ毎に實に恥入るなり。同情は必貴きもの
は、あらじと、實に然り。同情は病者を癒やし、死者を復生せしむるの力

を有す。予も病に冒されて以來友人は手紙を以て、訪問を以て、或は贈
品を以て、予に大なる同情を表せり、予は此等の同情を受くる毎に新元
氣を得、新生命を得たるの心地す。然り、同情より發するものは一錢の
金も、一通の書も、一口の言も、實に千萬金の價あり、其價值は金品に存せ
ずして、其原因なる同情の念に存する也。

予病氣に罹りたる當初、身は一室を出づる能はず、只管苦悶せる時、我
親友某氏は自ら進みて京都より來り、一週間許明石に滞在し、教會信徒
を勵まし、予の爲に連夜の祈禱會を開き、教會と予の爲に盡力せられた
り。且歸京後は在京の友人中より予の爲に見舞金を集めて送附せら
る。予は氏の同情を終生忘るゝ能はず、是れ予が大なる同情を受け
り、と感じたる初なりき。予が身體強健にして同情を要すること少か
りし時には、格別其價值を知らざりしかども、今や病に難み之を要する

切なるものあるに及びては、同情の價値の如何に高く、如何に貴きものなるを悟るに至れり。其切なる念を有するが故に同情ある人とは是なき人とは予の眼中に明かにして。同情に充てる人の舉動卑しく、言語拙くして、外見不情の如く見ゆることあれども、予の心に感謝の念、喜悅の情を溢れしむ。予は實に我身に徴して之を知りたり。故に予も自ら同情の人となり、一言をはき、一書を認め、一手を動かすにも皆此同情よりせんと決心せり。同情には實に天の香あり。然り斯く同情の價値を感せしむ病氣よりするにせば、病者も亦福なりといふべきか。

第七項 活けるキリストの同情

予が病氣に罹りし以來、曾て我に依り、我家に宿りしものにして、今は我を顧みず、知らざるもの、如くするあり、予が友にして予を疎遠にす

るものあり。人は我を棄て我に遠ざかる、我は人の無情を厭ふ。

予は人の無情を感ずる毎にいよ／＼キリストの同情の如何に深く、如何に慕はしきものなるを知るに至りたり。キリストは昨日も、今日も、永遠までも變ることなく、活きて吾人と毎日毎時偕にあり。常に予に對して曰ひ給へり、「我は爾の善牧者にして、爾は我羊、我は爾の兄にして、爾は我弟、我は爾の親にして、爾は我子、實に我は爾のものにして、爾は我もの、我の此世に降りしは、爾の如き亡はれたるものを救はん爲、我の十字架に苦みたるは、爾の如き罪に汚れたるものを助けん爲、我の天に昇りたるは、爾の如き苦むものを我居る所に容れん爲なり、我は曾て貧乏を嘗めて、爾の貧乏を知り、我は曾て病人の枕邊に侍りて、爾が今の病苦を知れり、我は爾と偕にあるを喜び、爾を救ふを樂む」と。世に力となるもの多しと雖、キリストの同情に如くものはあらず。世に數多の寶あ

もど雖キリストの同情はと貴きものはあらざるなり。キリストの同情、あゝ是れ吾人が活力なり。人の同情すら吾人に新元氣、新生命を與ふとせば、況んやキリストの同情をや。世にキリストの同情の美しく慕はしきを教ふるもの種々あり、而して病氣は其一なり。

第八項 神の保護を實驗す

予傳道に従事してより十有餘年、明石教會に牧師たるの時に於て病魔に胃されたり。時は明治三十一年の四月、東京に組合教會總會開かるゝと同時に、返子に教役者會催されれば、予は此等に出席せんとせり。其前日は安息日なりければ、予は講壇に立ちて説教せしに、咳頻にして語を續くる能はず。されども予は左程の事とも感せず、醫師より含嗽劑を受け、途すがら之を用ゐつゝ、濱松に宿りしに、其夜發熱を覺え、

返子、東京にある間は常に之が爲に苦み、辛うじて議會に列したり。其時一友は勸めて、早く専門醫の診察を乞ふべしといふ、予乃ち醫學士高田、田安氏にゆき診察を受けたるに、肺尖加答兒と診られ、今後温暖の海濱にありて保養すべきを懇諭せらる。我任地、明石は幸に此に適したれば、予は大希望を抱いて早速歸宅したり。其後數日間は發熱尙高かりしに、教會執事なる醫士、湊謙一氏の親切なる治療を受け、半年ばかりを過ぎ、其年の十月に至りて予は殆ど全快したるを覺えたり。予は神に感謝しつつ、再び教會傳道の任務に従事し、復半歳を送りたり。然るに其翌年の四月、京都に於て過度の勞役中、突然咯血したり、思ふに前日來の疲勞に加へて、明石より異なる京都の寒冷の氣候之が近因となり、病氣は再發したるならん。歸來療養に手を盡し、良藥を用ゐ、滋養物を食し、轉地をなし、及ぶ丈の事をなしたれども、病は容易に癒えず。暖氣

増さば快かるべし、氣候定らば快復もすべし、涼くならば健康にもなるべしと、たい前途を望みて一箇月を過せし、二箇月を送り、遂に十箇月に及びたれども、其希望は全く水泡に歸し、何の効果も見えず。然るに其間は幸ひ當地に保養せられたりし平山武知氏の同情を以て、説教を擔任せられ、又神戸の村上俊吉氏親愛の情を以て責任を負ひ來り助けらるることありて、安息日には何の不足も感せざりしなれども、かくて多忙なる氏の足勢を長く煩はす事も望むべからず。且教會にも専任牧師を得ざれば、活潑の傳道をなし難しと感じ、斷然教會を辭することに決心したりき。然り、一方よりすれば、予は元來一錢の資産貯蓄なく、これまで教會より受けたる報酬を以て漸く一身一家を支へ來りたるなれば、今辭職せば、明日より如何にして生活すべきかを知らざるなり。されども、予はおもへり、予が牧職を奉じたるは、予の爲にあらざして、教

會の爲なり。故に教會の爲には喜んで生くべく、甘んじて死すべし、今後の生活如何は憂ふるに足らず。今日予が神と人にと對する本分は、保養にあれば、其後の運命はたゞ神に託せんと、爰に於て明治三十三年一月二十六日、予は教會に辭表を提出し、教會は數箇月協議の後、漸く之を受けられ、予は自由に保養し得る身となれり。もし予に我と我一家とを一箇月支ふる資あれば、一箇月間生存すべく、もし二箇月の資あれば、二箇月生存すべし、予は予が現今の本分たる保養を神の許し給ふ間務めて、此世を終らんと決心し、かくは斷行したり。當時予が心情を譬ふれば、天地晦冥、四圍慘憺、然も僅かに微光の眼を射るものあるは、爾曹まづ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるべしとの神の約束あるのみ、他は悉く凄壯、山鳴り、海濤さ、暴風、大雨、雷鳴さへありて、天の勢、震動する物、凄き夕、予は憔悴枯骨の形を以て、孤獨斷

崖の上に立ち身を跳らして大海に飛込みたるの心地せり。然るに幸なる哉、予が飛込まざる前に救船は予を已に待ちたりしもの、如く。明石教會は此月より若干の金員を給せられ、當時大阪に開會中なりし組合教會總會出席の有志者諸君は醜金して予に寄贈せられ、教役者會も此と同時に數箇月間予に援助を與ふるの約あり、其他親戚よりの扶助あり、又妻が有志者に英學を教へて多少の月謝を得るあり。かくして予は一言半句も人に依頼せざるに、教會を辭したる其月より毎月必要なるものは盡く四方より集り來りぬ。あゝ讚美すべき哉、神の愛神の保護、神は予等を捨てず、其大能の聖手を以て護り給ふとの證據を與へ給へり、ハレルヤ。

其他予の爲に新鮮なる空氣の流通よく、清き光線の射入明かなる持家を無賃にて貸し與へんと申込まるゝ友あり。又其家宅を時々修覆

するの必要あるに方りては、予輩が許に英語を學びに來る青年大工ありて、月謝の代りに無賃にて之に應せんと求むるものあり。又前文に書せる教役者會よりの援助約束期限の畢れる時に在、前橋の一友、月々同額の金を送らるゝあり。神は予等を愛して護り給ふとの證は一回、回明白なるに至れり、ハレルヤ。

斯の如くにして予等は一家五口を糊すべき月々の經費を得たり。されども予は病者なるが故に常に滋養物を食せざるべからず、身を温むべき毛布を購はざるべからず、時に子供等に着物を與へざるべからず、其他臨時の費用を要する事件起り來りて、爲に窮乏に逼ること度々なり、此時に當り、神は常に其乏きを賑はし、不足を補ひ給ふ。ある時一友は金員と共に書を送りて曰く「古預言者エリヤの爲に神は鴉を用ゐ給ひしが、神は兄の爲に僕を用ゐる小き鴉となし給ふこと感謝に堪へ

す候と、あゝ何ぞ其言の謙にして其心の潔きや、氏はかくして其後毎月金若干を送らる。予は氏の好意を受くる毎に妻と共に感泣せずんばおらず、予は氏の金品を受くると共に復信仰のよき教訓を受るなり。其他思はず、計らざる人、見ず知らずの無名氏より時々見舞品を贈られ特別必要の場合には必ず其需用を満すを得たり、ハレルヤ。

今其一二例を挙げんに明治三十四年十月廿六日、次女安惠、数日の病にて天國に移されたり、當時葬式等萬端の事に多くの出費を要したり。然るに予は其時無一物の姿にてありしが、神は四方の同情に富める兄弟の手を以て予等に豊かに給し、其費用を拂ひ盡し、小なりと雖墓碑までも建てて尙餘あるの金を與へ、以て予等を護り給ふの證を加へ給へ、ハレルヤ。

又明治三十五年の夏、長男忠雄、耳を疾みければ、大阪に往き専門醫の

治療を受けたり。大阪には幸ひ親戚ありて其宅に厄介となりたるが、然も藥代、手術料、旅費、謝禮等に少からぬ費用を要せり、予には其準備なし、さりとて逡巡して期を失すべきにあらねば、萬事を神に託し、出發せんとする朝、當時米國に遊學中なりし一友より突然金子を送り來られ、それより十日を経ざるに長男の病氣を知らざるものより、額々寄送あり。爲に彼が治療の費用を拂ひ畢りて少しも欠くる所なかりき、ハレルヤ。

又明治三十七年一月、予の病氣頓に募りたるに、幼兒等を抱へたる妻は、到底身動もまゝならぬ予を看護する能はず、もし一家の主婦たるものにして倒れんには大災事なれば、醫師友人等の勸告に従ひ、神戸より一看護婦を雇ふの手順をなせり。然るに其朝、一友の訪問を受け見舞として金若干を賜はり。其翌日、當地の婦人會より同額の金を與へら

れ。其他續々の寄與ありて看護婦(此人は予等の知己なりしかば好意を以て看病せられたり、附添人、滋養品等、藥品は常に醫師、湊兄の惠與せらるゝ所たりの費用を拂ひ盡して少しも不足を感ずるとなかりき。神は復予等を保護し給ふの證を加へ給へり、ハレルヤ。

又明治廿八年の春、予の病は再び重り、衰弱加はり、呼吸苦く、咳嗽甚く、牀上に臥したるまゝ、如何ともなす能はず。こゝに於て再び看護婦を雇ひ、特別なる滋養品を求むる等、少からぬ費用を要したり。時に天來の飛報は郵便の聲と共に來れり、急いで披き見るに、發信者は米國桑港にある主の僕(日本人)とのみありて、名なし、其紙面に書して曰ふ、「肉に於ては未だ相見ざれども、主によりて余の敬慕する兄よ、……別紙の郵便爲替は甚だ無禮の様に候へども、決して余が兄に呈するに非ず、主の惠に由て得たるものを余はたい兄に取次致迄に候と、而して内に八

弗五拾仙(當時の日本貨にて拾七圓貳拾六錢)の爲替券あり。予一度は其意外なるに驚き、再思して神の恩惠の如何に深きかを考へ、妻と共に涙にくれつゝ感謝したり。其外此種の例は枚舉に遑わらず。

予の財布は常に少額の金より有せず、されども一度拂へば従つて復入り、二度散すれば従つて復集り、與れば復與らる、あゝ予の財布は實に無盡藏なり。予は數思ふ、神は適當なる時、必要に應じ、豊かに與へ給ふが故に、予は貧賤なれども實は富豪、無一物なれども實は萬物を有せりと。斯くして予が病に倒れたるより以來、今日に至るまで九年間、予と予の家族は一錢の負債もなさず、餓ゑず、凍えず、滋養物も食ひ、暖かに衣、何の不足も感せずして過ごし來りぬ。嗚呼、不思議なる哉、神の聖手や、予は之によりて直に神の大能の予輩に加はり、神の靈の予輩に添へることを確信する也。

予が窮乏困苦の際神は常に予の心底に耳語して曰く、爾は爾の衣食住に就て憂ふる勿れ、爾に必要なるものは我此を與たり、後復與へん、爾は只管天職を盡すことをせよと。予は此聲を聴く時に左右を顧ず、前面に眼をとめ、予が前に置かれたる道程に向て一直線に奮進すべき感

を深くす。而して一難は一力を増し、一苦は一望を加へ、貧も憂ふるに足らず、病も哀むに足らざるを知るに至れり。諸君よ、神が賤しき予の如き者をも、かく豊に恵み給ふは、誰をも豊かに恩み給ふの證なるぞ。

嗚呼、信徒諸君、殊に教役者諸君よ、爾曹まづ神の國と其義とを求めよ、されば此等のもの必要の物は爾曹に加へらるべしとの神の約束を確信し。諸君の一身を思ふに及ばず、一家を顧るに及ばず、専心一意其天職を盡せよ、神は諸君と偕にありて保護し給ふなり。こは予一人が實際のみならず、古來無數の聖徒と共に之を證す。諸君よ、小なる予にも

神の大能加はるを見て諸君の上には一層豊かなるものあるを知り、何物をも憂慮せず、唯一心に其馳驅場を馳せよ。

第九項 神の聲と手は吾人の身に殊に優しきを知る

親が平素其兒に乳を飲せ、衣物を着せ、手もて食卓に招き、寢所に休ます等の舉動は優し。されども其兒病に罹るに際しては、優しき親は一層に優しく、其兒を起臥せしめ、汗を拭ひ、藥を飲ましめ、爾求むるものはなきやと問ひ、オ、我兒よと呼ぶ其態度は殊に優しきなり。

此の如く、神の手、神の聲は、吾人健全の時にも優と雖、病氣に胃さるゝに方りては格別其優しきを感じず。吾人が牀上に横はれば、毛皮よりも柔なる大能の腕を以て吾人を支へ給ふを知るが故に、苦の内にあれども安く、痛の中にあれども言ふべからざる平和を覺ゆ。予はかくして

毎夕安眠を得るなり神は吾人の枕邊にありて「オ、我愛子よ、我爾と偕にありて爾を離れず爾を捨てず」と語り「あ、我子忠美よ」と耳語き給ふ聲は實に慈母の聲にも勝りて優しきを感じずるなり。
此感想は予が病氣の重る毎にいよ／＼深くなる也。神は萬人に對して恒に優しく在し給ふ而して病人は之を感じ易し。これ恰かも寒暖計が妙しの寒暖にも感じ晴雨計が僅かの氣壓にも感ずるが如し。然り病氣は神の優しきを知らしむるもの、一なり。

第十項 神の愛なるを知る

予輩は愛子の過失を見れば必ず戒めざるを得ざる如く天父は吾人を愛し給ふが故に予輩に病氣を興へて之を鞭ち給ふ。予は現に此愛の鞭によりて醒め天父の美しき姿を見天父の妙なる聲を聞を得たり。

天父もし吾人を愛し給はずば此世に病氣なるものなきやも知るべからず。予の病氣に罹りたるは是れ天父の予を愛し給ふ證なり。されは何ぞ天父の愛を感じ得ざるを得んや。人或は自己の病氣を以て神に罰せられ捨てられたる證なりとなすされども予は然らずこれ神に愛せられ恵まれたる證なりと思ふ。予は神の寵子なるが故に此病あり此病ありて神の愛を感じ得ず是れ予の最も光榮とする所なる也。

第十一项 神は病者と殊に偕にあり給ふ

健全なるときにも神は吾人と偕に在したまふされども病氣のときには別て吾人を離れ去らず。スボルジョン曰く「樂器奏でられ喜色あり歎聲起るの筈には時に神を見失ふ事あり。されども悲哀の風吹ける病者の枕邊には神つねにあり」と見ゆこれ大に味ふべきの言

なり。

明治三十七年一月北風稍を鳴し、白雪紛々として窓をたゞくの口、予が病氣復重り、熱高くして久しく退かず、身は炎天に焼くが如くにて堪へ難し。此時思ひ起したるは昔時バビロンに於てかのシヤデラク等が子ブカデ子ザル王の爲に迫害せられし事なり。彼等は王の爲に燃ゆる火の中に投せられたるに「神の子」但以理三〇二五彼等と借に在し給ひしかば、彼等は何の害をも受くるなく、猛火の中を自由に歩み、頭の髪も燥す、衣裳も傷けず、火の臭氣だも付かざりし一事なりき。予が大熱中に苦むは恰かも烙々たる猛火の中に火炙に遭ふが如し。此時に際して予の力となり、慰となりしものは唯神予と借にあり、キリスト予を離れざるの一事なり。神は予の枕邊にあり、キリストは予の側にありて予と借にあることを一層明かに知り得たり。是によりて予は大

熱の予を潔くはすれ、決して害する能はず、其餘臭さへ付くまじきを思ひて大なる安慰を得たり。神吾人と借なりとの真理は最も貴重なりとはウエスレーの言ひし所なるが、病氣は此大真理を能く吾人に教ゆるなり。

第十二項 従順の徳を學ぶ

予の病氣重り、咯血あり、發熱ありて全身苦み、手も動かす能はず、足も縮むる能はず、口は啓かず、眼は見ず、四肢五體苦惱を感ずるに方りては「此れ我重き十字架なり、苦き杯なり」との念、心頭を去ざりし。此時主がグッセマ子に於てせられし祈禱(馬可十四〇三二―三六)を讀みたり。キリストは十字架の堪へ難き苦痛を前に見つゝ、祈禱の座に跪き、予は病氣の忍び難き苦痛を感じつゝ、同じく祈禱の内にあり。キリストは

口を啓きて「アバ父よ爾に於ては凡ての事能はざるなし此杯を我より
 取たまへ」と祈れり。神は實に大能なり、キリストより十字架の苦き杯
 を取り離す事易かるべく、予より病氣の苦杯を取り去る一擧手の勞の
 み。されば予もキリストと偕に天父の前に「アバ父よ爾に於ては凡
 事能はざるなし、此杯を我より取たまへ」と涙にくれて祈れり。然り予
 は此苦痛の時ほど熱誠に求めたる事なし。キリストは語を續けて「然
 ど我が欲ふ所を成んとするに非ず爾が欲ふ所に任せ給へ」と祈り給へ
 り。予もキリストに倣ひ、然ど我が欲ふ所を成んとするにあらず爾が
 欲ふ所に任せ給へ」と祈り。全身を神に託し、聖旨の我身になれかしと
 求めたる刹那、予は言ひ難き平和を感じつゝ、天來の安心を獲たり。

主よのむべき わがさかづき
 えらみどりて さづけたまへ

よろこびをも

かなしみをも

みたしたまふ

まゝにぞうけん

神の旨ならば如何なる病苦も忍ぶべく、神の意ならば何時迄も病床
 に臥すべく、神の命ならば何時にても瞑目すべし。然り予は病氣によ
 りて神に對する從順の徳を學ぶを得。又、スボルジョンの曰けん「從順
 の徳は夜更たけ、人静まりたる後、勉強思考に耽ければとて修められず、
 晝間席暖まるの暇なきまでに四方に活動したればとて得べからず、唯
 患苦を忍ぶによりて始めて得らるべし」との眞理を實驗したり。此從
 順は宗教の奥義なり、而して病氣は吾人に此奥義を示す。然らば病氣
 も亦大教師にあらずや。

病氣の人を益する多々あるべしと雖、此十二は其重なるものなるべ
 し。病氣を取除かるゝは福なり、されども此に勝つ力を與へらるゝは

尙一層の福なるなり。

第九節 病者の活動

第一項 普通の病者

世界救済の業に與かるものは健全の人のみならず、病者も其一部を擔ひ得。病者は健全の人の如く自由に動く能はず、其欲する如く奔走する能はざるべし、されども病者は病者相應の活動をなし得べし。澤山保羅は多年肺患に冒され、屢病床に呻吟せり、されども浪華教會の牧師として、よく其任務を盡し、病者を慰め、罪人を教へ、悪人を清めたり。彼恒に曰く、「余は病床に死するを好まず、必ず戰場に討死せん事を期す」と。又曰へり、「余は死の目前に迫るとも尙常の如く働をなして變ることなかるべし」と、然り彼は臨終に至るまで能く主に忠事し、靈の戰場に

於て討死したり。徳永規矩は十六年間、同病に惱まされ、苦痛の内に病床に臥したりしが、其間に「逆境の恩寵」を著はし、人をして天の恩恵を歌はしめたり。正岡子規も多年同病に苦みたりしが、病床に於て常に筆を執りつゝ、文學上に貢獻する多大なりき。予が病友、座古愛子は、僕麻質斯病にて一步も動く能はず、手指曲りて自由ならざる身を以て尙筆を執り、彼處、此處にある病者に手紙を書き送りて、自ら實驗せる神の恩恵を告げ、多数の病人を慰め勵ませり。キントウは幼少の時より啞にして聾なりしが、聖書に關する種々の著述をなして大功を世に遺し。ミルトンは盲目なりしが、不朽の書「失樂園」を書いて大に世の人心を誘導したり。ロポルト、ホールは幼き頃より、身に苦痛を覺えざる時なかりしが、英國に於ける大説作家として其任務を全くし。バックスターは久く病床に苦みたりしが、其間に「聖徒の平安」なる書を著して天の光

明を照したり。バイロンは性來潺弱にして跛者、ポーブは醜き僂僕なりしが共に文學上に於て世を益したるや大なり。シセル、ローツは病の身を以てアフリカ經營の大業を成就し、ジョン、ノックスは虚弱の體を以て大改革をなし、新島先生は病羸の身を以て同志社を建て、スチーブンも、グリーンも皆多病の身を以て文學上に多大の功をなしたり。病人は不自由なれども、其有する總の力と時とを全く神と人との爲に用ゐて餘す所なくば、案外大なる効果を奏し自己さへ驚駭するに至ることあり。然り病者も必ず世に活動し得るものなるは過去の歴史に徴して十分に證し得るなり。

第二項 大病人

人或は云はん病者の働き得るは、病輕く、多少の餘力あり、自由あるが

爲ならん、大病人はなし得まじと。されども予は云はん、大病人と雖必ず活動し得と、何を以て之を云ふ乎。

彼もし神の愛を樂みつ、神を愛し、神の恩を喜びつ、神に順ひ、神の力を受けつ、神を信じ。常に感謝に満ち、喜悅に溢れ、平和に安んじ、其念高く、其情清からば、彼病牀に仰臥して一言を吐かず、一指を動かさずとも、之によりて能く家族を救ひ、教會を福し、親戚を助け、朋友を益するを得べし、彼が信仰を以て臥すは是れ大なる活動なり。

尙彼が生ける間は祈禱を以て世の爲に盡すを得。世界救濟の事業の成效は健全者の東奔西馳に歸する多かるべきも、亦病者の祈禱が與つて大なる力なるは確なり。彼は病牀に横はる間に目前にある一家の爲、各地にある友人の爲、都鄙にある教會の爲、學校の爲、慈善事業の爲、國家の爲、世界萬民の爲に祈禱し得るなり。彼はかくして健全者と偕

に働き、其事業を助くるを得。健全者は公の業をなし、病者は隠れたる業をなす。されば健全者、病者同く神の前に「善僕」なり。否、病者にして全身全霊を神に獻じ、信仰の内に生息し、其天職たる祈禱に力ひるゐらば、或は一種の健全者よりも大功を奏するやも知るべからず、さらば大病人も世の爲に活動し得るなり。大病懼るゝに足らず、吾人の懼るゝものは神と人との爲に盡す精神なきにあり。病者よ活動せよ、大病人よ活動せよ。

第十節 詰局

病氣は實に苦きものなり、されども吾人喜んで之を忍ぶは神が之を以て吾人を清め、高め、強め、鍊り、救はんとなし給ふ聖旨を念ふが故也。吾人神の光れる顔を拜し、神の妙なる聲を聴き、神の手に觸れ、神の體に

接し、神を感得するは、幸福はなく、榮譽はなし、神は吾人の病氣を以て此幸福、榮譽を興へ給ふなり。予が病氣に罹りたるは、岩崎、三井、鴻池、住友の如き富豪となりたるよりも、尙幸福なり、彼等は此世の財産を多く有せり、されども予は病氣によりて天の財産を得たり、金(金)よりも神(神)を獲たり、地と天の財寶の所有者たる神を獲たり。又予が病氣は予が學士となり、博士となり、大博士となりたるよりも、榮譽なり、彼等は天地宇宙の理法を學びて之を知れり、されども予は病氣によりて其理法を支配し給ふ神自體を知るを獲たり。又病氣に倒れたるは世界を漫遊したるよりも、福なり、諸友人を始とし、衆くの人々は世界を漫遊し、大洋を渡り、大陸を越え、都を察し、博覽會に入り、學校を觀、學者に接し、實に王國(Kingdom)を觀たり、されども予の足は一室を出ずして其王(King)に謁見するを獲たり。天上天下最重の財、最深の理、最上の王たる神を獲

たり、わゝ何等の光榮ぞや。されば予は身に病むるを哀む能はず、寧ろ感謝するなり。我身の強弱は問ふ所にあらず、唯眞に神を知り、神に觸れ、復人の爲に眞正の益を圖るを得ば足れり。病氣は實に此事をなさしむ、病氣は吾人に不幸のみを興へず、大幸福をも興ふ。げに病氣は神の人を救ひ、人を活かし給ふ一方法なる哉。

第十二章 神人合一と死

第一節 死は難關なり

人生の慘事死より甚しきはなかるべし。吾人は此によりて住馴れし此世に別を告げ、經營したる大事業を棄て、敬愛する父母、妻子、朋友親戚に離る。人生之はと痛き事はまた世になからん。

人は謂ふ正を踐み、義を行ひ、天下國家の爲に盡し、斃れて後止むべしと。然り予も斯く思ひ、斯く信じ、斯く語り、斯く筆したり。殊にキリストの贖を受け、其救に預り、永生の人となれるものは最早死を懸念するに及ばずとしたり。然れども死は中々容易なるものにあらず。予一たび危篤に陥り、將に此世を去らんとするの刹那に及びたる時。過去の生涯は一時に予の眼前に映じて、これまで悔いたりと思ひし罪も未

だ全く充分に悔ひず、心の隅々に罪惡の粘着せるものあるを知り。悔恨不安、やるせなく、心苦く、胸痛み、堪へ難きものあるを覺えたり。然れば病少しく怠りたる後、神の前には勿論、人の前にも悔い、或は言を以て、或は手紙を以て、或は品物を以て償ふべきことをなしたり。予の心は之が爲に青天白日、光風霽月、身爲に軽く、兩翼を張りて、天空に翔り得るの心地せり。

然るに明治三十八年の春、予の宿病はまた重り、身體は大に衰弱し、呼吸は頻々切迫し、死は再び我が眼前に顯はるゝに及びて、予は尙ほ之に打ち勝ち易からず、實に忌むべく、厭ふべきものなることを實驗したり。予はキリストがゲッセマテの園中、死を目前に見給ひし時、血の汗を流し給ひしを憶ひて、一入同情の念禁する能はざりき。予は其時死の憎むべきものなることをしみて、身に覺えたり、吁、死は暗黒なり。

然も予は其裡に於て未だ曾て見ざるの新光、明を見、新希望を得、新安慰を興へられたり、讚美すべき哉、死の時の力となるものはたゞキリストなり。死時の希望は一にキリストに頼れり。

第一節 吾人の死とキリスト

蟲の氣息を吐きつつ、牀上に仰臥し、暗黒なる死の手に壓はれたる予の心に、電光石火の如く閃きたるものは、わが父の家には、第宅おほし、約十四〇二の言と、今日なんぢは我と偕に樂園にあるべし、路二三〇四三の兩語なりき。此れ予が幾度か讀過したるものなりしが、一度死に瀕するに當りては、慈母の聲の如く響きて、俄然天來の靈力に觸れ、新安慰と、新希望と、新生命の湧き来るを覺え、大苦痛の間にありて、喜悅裡に備つるものあるに至れり。キリストの眼中には、來世は手に執る如

く鮮明にして、故郷の光景を物語るが如し。恰かも二旅客がふと旅伴となり、四方山の雑談後、其一人が「此時を越さば先方に我父の大なる第宅樂園あり、今日我は其處に歸るべし、我は爾を伴はん、爾我と偕に父の家に来るべし」と曰に同じ。吾人はキリストと其證言によりて、來世を信じ、第宅多き天父のホームを樂み、盜賊に均しき我を導きて「今日にても伴ひ往き給ふ樂園を望むなり。予は從來來世を見ること、恰かも海紙を隔てて櫻花を見る如くなりしが、今や其紙は變じて玻璃となり、來世は予の前に一層明かになりて予の眼を射るに至れり。仰ぎて明白に天國を望ば死も喜悅、平安の間に遂げ得るなり。かのステバノが將に石にて擊殺されんとするや、神の榮光と其右に人の子の立るを見て使徒七〇五五、天使的死亡をなし、天の榮光を顯はしたるも又之が爲なり。

天國の光明は吾人の眼を射るとも、之に至る死出の山路は尙險しく、死の河は浪高し、吾人は生けるまゝ天國に移されん事を欲す。されども是れ空望なり、吾人一度は必ず此暗黒なる死の山路を越え、死の河を渡らざるべからず、然らずんば天國に入るを許されず。然るに幸なる哉、キリストは自ら來りて其山路の案内者となり、電柱となり、其河の渡舟となりて、吾人を父のホームに至るまで恙なく守り導き給ふ。「我なんぢらの爲に所を備へば又來りて爾曹を我に納べし」約十四〇三と、わゝ愛と能に富めるキリスト自ら吾人の手を執り給へば吾人は決して憂ふるに及ばざるなり。茲に予臺灣に航せんとするに當り、ある少女を其親より託せられたりと假定せんに。航海中暴風起り、怒濤荒れ、船は木葉の如く上下して、予自らも船酔を起し苦まん。然るに託されたる其少女の危険苦痛に思ひ至る時は、予の苦痛困難は忽ち他所に見ひ

たすら其少女を安全に保護せざらんや。我んや大能至愛のキリストは吾人の一身を天父より託せられたれば吾人を彼岸に達するまでは固く守り給はざらんや。

キリストは吾人を父のホームに導きて其最大の榮光に與らせ給ふ。彼は曰く我をる所に爾曹をも居しめんとしてなり〔約十四〇三〕我をる所とは其居り給ふ場所のみならず又其榮光の狀態をも含むなり。されば其有し給ふ榮光は至高至大のものにして此世に於ける何物も此榮光に比すべきものなきなり。キリストは吾人を愛し給ふが故に此榮光に與らせ給ふ。吾人はキリストの榮光を享くる爲に死す。キリストは父の家を吾人罪人の爲に自由に開き準備を整へて待ち給ふのみならず自ら來りて吾人を導き而して天父聖子聖靈の聖き交に入れて其榮光に與らせ給ふ、あゝ何たる幸福ぞや。されば吾人は死により

て其完全なる交際に入るものなれば何ぞ死を痛むべけん。死は吾人を殺さずして却つて生かすなり。然り吾人は生る爲にキリストによりて死するなり。

第三節 天國と諸聖徒

天國は大なるホームにして天父あり聖子あるのみならず吾人の舊友古來の聖徒凡て集まりて世界的聖者の一大家族をなす故に吾人の理想的國家完全なるホームは實に此處に存す。

吾人は死によりて既に此世を去りし親兄弟朋友及び曾て誘導したる人々のある所に至るなり。彼等は曾て此世にありし時に優りて一層信仰に進み愛深く義高くなれる精神を以て吾人を待てり。吾人は死によりて此等の聖徒と聖き交の内に入る也。

加^{くわ}之^の天^{てん}國^{こく}には古^こ來^{らい}の聖^{せい}徒^との集^じ合^{ごう}せるあり。パウロ、アウガスチン、ザビエ、ルーテル、ウエスレー等^ら種^{しゆ}々^くなる大^{だい}艱^{かん}難^{なん}を經^へ來^{きた}れるものありて、彼^{かれ}等^らの後^{のち}を追^おふものに對^{たい}して深^{ふか}き同^{どう}情^{じやう}を有^{いう}す。彼^{かれ}等^らは吾^ご人^{じん}を同^{どう}一^{いつ}の戰^{せん}場^{ばう}に奮^{ふん}闘^{とう}する兵^{へい}士^しの一^ひ人^{ひとり}として待^{まち}てり。吾^ご人^{じん}は死^しによりて彼^{かれ}等^らの交^{まじ}りに入^いるなり。

吾^ご人^{じん}は敬^{けい}愛^{あい}するもの住^{すま}る所^{ところ}を慕^{した}ふ。人^{ひと}は競^{きやう}ふて英^{えい}米^{まい}等^らの文^{ぶん}明^{めい}國^{こく}へ遊^{ゆう}歴^{れき}す、然^{しか}も天^{てん}國^{こく}の文^{ぶん}明^{めい}は英^{えい}米^{まい}に勝^かること幾^{いく}層^{じやう}倍^{ばい}ぞや。されば吾^ご人^{じん}天^{てん}國^{こく}に往^ゆくは如^{いか}に樂^{たの}しき哉^や。吾^ご人^{じん}は沙^さ漠^{ぼく}にある旅^{たび}人^{びと}の水^{みづ}を慕^{した}ふが如^{ごと}く、終^{しゆう}日^{じつ}遊^{ゆう}び疲^{つか}れたる小^{せう}兒^にの母^{はは}を求^{もと}むるが如^{ごと}く、キリス^{きりす}トの膝^{ひざ}下^か、天^{てん}國^{こく}を慕^{した}ふ也^や。吾^ご人^{じん}の永^{えい}遠^{えん}住^{すま}ふべきホームは實^{じつ}に此^こ所^{ところ}にあり。吾^ご人^{じん}は此^こ所^{ところ}にて主^{しゆ}に事^{つか}へん事^{こと}を欲^{ほつ}す。それ死^しは恰^{あた}かも睡^{すい}眠^{めん}の如^{ごと}し。一^{いち}夜^や熟^{じやく}睡^{すい}し、翌^{あした}朝^{あさ}東^{とう}天^{てん}に昇^{のぼ}る太^{たい}陽^{やう}と共^{とも}に起^おき出^いで、新^{しん}元^{げん}氣^きを以^{もつ}て其^{その}業^{げい}に従^{じゆ}事^じする如^{ごと}く、吾^ご人^{じん}は死^しなる眠^{ねむ}りにより、天^{てん}國^{こく}に醒^さめ、新^{しん}なる精^{せい}氣^きを以^{もつ}て新^{しん}生^{せい}を得^えるなり。死^しは或^{ある}者^{もの}にとりては刑^{けい}罰^{ばつ}なれども、吾^ご人^{じん}キリス^{きりす}ト信^{しん}者^{じや}にとりては大^{おほ}なる祝^{しゆ}福^{ふく}なり。故^{ゆゑ}にスボルジヨンは死^しを怖^{おそ}れず。パウロは死^しを樂^{たの}み。サボノローラは火^{くわ}刑^{けい}に處^{しよ}せらるる前^{まへ}微^{せい}笑^{せう}を湛^たへ。聖^{せい}フランシスは重^{じゆう}病^{びやう}に罹^かりて、もはや望^{のぞ}みなしと宣^{せん}告^{こく}せられたる時^{とき}、よくも來^きませし死^しなる姉^{あね}妹^{まい}よと呼^よびつつ、讚^{さん}美^び歌^かを唱^{とな}へたり。吾^ご人^{じん}は死^しにより此^{この}世^よの生^{せい}涯^げを終^おると共^{とも}に新^{しん}世^{せい}界^{かい}に入^いり、新^{しん}生^{せい}を送^{おく}るの始^{はじめ}となる。故^{ゆゑ}に死^しは決^{けつ}して惡^{にく}むべきものならず。死^しは實^{じつ}に生^{せい}なり。

第四節 死の感化

死^しは本^{ほん}人^{じん}を福^{さい}するのみならず、其^{その}感^{かん}化^{くわ}を以^{もつ}て世^よを福^{さい}す。世^よは吾^ご人^{じん}を妨^{さまた}げんとして殺^{せつ}害^{がい}することあり、されども死^しの感^{かん}化^{くわ}を害^{がい}する能^{あた}はず。

これ恰かも切り離ちたる樹株より新芽を生ずるが如し。
 ユダヤ人は基督教を亡さんとしてステバノを撃殺したり。彼は將
 に呼吸たえんとするに際し、大聲に呼はりて、此罪を彼等に負はしむる
 勿れと祈れり。而して其殺害者中よりパウロを出せり。彼等は復キ
 リストを釘殺したり。時に彼は十字架の上に於て、父よ彼等を赦し給へ
 其爲どころを知らざるが故なりと祈り給へり。之を目撃したる百夫
 の長は、誠に此人は義人なりと讃めたり。人は義人を殺す、されども死
 の感化を亡ばす能はず。されば吾人神に祝せられ義とせられたるも
 のは、其生ける時に於てのみならず、其死する日に於て神の榮を顯はす
 べきなり。吾人は戰場に斃れんも、床上に死せんも、そは問ふ所にあら
 ず、宜しく最後の呼吸まで神と人との爲に盡すべし。吾人にして終始
 神に従順ならんか、死は神の榮光となるなり。

第五節 結局

罪惡は怖るべし、されども死は懼るべきものにあらず。神の聖旨な
 らば吾人は何時にても死すべし。
 吾人は生によりて神と合一し得る如くに、復死によりて神と合一す
 べし。されば吾人は生を樂む如くに死を樂み、生を喜ぶ如くに死を喜
 ぶ。生には生の榮あり。死には死の榮あり。生死共に吾人をして神
 と一致合體せしめ、人生の目的を成就せしむ。然らば死も亦榮光ある
 哉。

終 結

第十三章

神人合一を全くする最大活力

吾人が天然を樂むも、聖書を讀むも、神學を學ぶも、祈禱をなすも、患難に堪ふるも、病氣を忍ぶも、死を甘んずるも、皆神と合一せん爲なり。吾人は神を樂むが故に、此等を樂む、吾人は神を喜ぶが故に、此等を喜ぶ。たゞ吾人は神と合一せん事を切望す、人生の目的は愛にあり、是を全くして吾人始めて満足を感ず。

されば吾人が神と合一する最大活力は何ぞや。吾人が天を仰ぎて之に昇らんとする向上心なる乎。鹿の溪水を慕ふが如く、神を慕ふ敬慕心なる乎。將た又吾人が難行苦行の鍛鍊なる乎。然り、此等は與つ

て力なきにあらず。されども最大活力は神の吾人を愛し給ふ愛にあり。神の吾人を護り給ふ大能にあり。神の吾人に降し給ふキリストにあり。一言に約すれば神にあるなり。

第一節 神の大なる力にあり

人は微力なれども、神は大能なり。人は弱けれども、神は強し。地球は多少太陽を引く力を有す、されども太陽が地球を引く力は百千倍大なり。太陽の引力によりて地球は其軌道を秩序整しく廻轉す。嬰兒は其小き腕にも母親を抱ゆるの力あり、されども其母親が嬰兒を抱く力は百倍強し。母親の力によりて嬰兒は母の膝に安全に在るなり。吾人が神と合一するも、吾人の力全く之なきにはあらざるべし。されども主として神の大なる力に存するを知らざる可らず。

第二節 神の深き愛に在り

第二の活力は吾人の浅き愛に在らず、神の深き愛に在り。ヨハ子は他の弟子と異にして特別主キリストに親近したり。是れ彼がキリストを愛するの愛、他の弟子に勝れるによるならん、されども彼がキリストの愛を認識したる所一層大なるによるなり。視よ其著書中自己の名を現はさず。返つてイエスの愛する一人の弟子〔約十三〇二二三〕或は「イエスの愛せし所の弟子〔約二十〇二〕なる名稱を以てせしは、彼がキリストに愛せらるゝを最上の榮譽として樂みたるが故なり。彼はキリストの愛を知り、感激の涙に溢れてキリストに親みたり。されば彼は自らの愛によらず、キリストの愛に引付けられ、キリストと合一するの特権を得たるなり。

神は常に吾人を愛し給ふ、されども吾人が神を愛する迄は之を知る能はず。吾人神を愛するに至りて始めて神の吾人を愛し給ふを認むるに至る。彼の放蕩兒が親をすて、遠國に有りし間は、其親の愛を知る能はず。然るに一朝悔悟して親を慕ひ、遙々國元に歸るに及びて、父の温き愛をさとり、感謝の涙に咽びたり。彼が親を愛するに至る迄は親の愛を覺る能はず、自ら親を愛するに至りて始めて之を知り得たり。斯の如く吾人も神を愛するまでは神が吾人を愛し給ふを知らず、神を愛するに至りて始めて神の愛の深きを知るに至る。又神を愛すること少き時には神の愛も又薄きが如く思はれ、神を愛すること厚きに至れば神の愛の厚きをいよく覺ゆるなり。されば神の愛に厚薄あるにわらず、吾人が神を愛するの愛に厚薄あるなり。神の愛は終始變ずる事なし、吾人が其愛を認識する時始めて神に引付けられ、合一せざるを

得ざるに至るなり。

第三節 神の同情にあり

神は吾人を深く愛し給ふが故に、吾人に對して厚き同情を有し給ふ。神は弱き者の力となり、小き者の父となり、苦める者の安慰者、貧しき者の保護者、老たる者の杖、罪人の救主、病者の醫師となりて同情を萬人に寄せ給ふ。

予が幼児先年腦病に惱みて床上に苦めり、予は其枕邊にある時、彼は夢中になり、予の指を握りて離さず。折柄予はある急用起りて其座を立ち去らざるを得ず。予は其小き手を取り離すに易々たれども、之をなすに忍びず、こしにても小兒の力たらんとして其場に留まれり。此の如く吾人も小き手を以て神の手を握る時は神之を離すに忍び

給はず、返つて吾人の力となり、生命となり、厚き同情を以て吾人を勵はり給ふ。然るに世には神の同情を半信半疑の間に置くものあり、何たる不信不敬ぞや。吾人は宜しく神の同情を信すべし。これ吾人が神と合一する第三の活力なる也。

第四節 天父の吾人を慕ひ給ふ情切なるにあり

蟻の甘物を尋ね、鹿の溪水を慕ふが如く、吾人は天父を慕ふ。されども天父が子たる吾人を慕ひ給ふの情は一層切なり。

予曾て同志社に學べる頃、毎年夏期休業には郷里岡山に歸り、母の膝下にあるを樂みとし、休暇の數日以前には必ず其由を通じ置けり。當時山陽鐵道の布設未だならず、神戸より岡山迄歸るには汽船によらざ

る可らず、されば風波ある時は一日位遅延する事あり。されども我母は之に拘はらず、予の好める物を準備して、前日より予を待ち、人力車の響すれば格子をのぞき、人聲すれば門に出で、かくして予の到着する頃は最早待ち疲倦れて横臥したるを見ることありたり。予が母を慕ふの情切なるものあれども、然し母が予を慕ふ情は予にまさること十倍なりき。此一事は天父が其子たる吾人を慕ひ給ふの情の一端を示すに足らんか。吾人は天父を慕ふ、されども天父が吾人を慕ひ給ふの情は千万倍切なり。天父の吾人を慕ひ給ふ此切なる情は是れ吾人が天父と合一する第四の活力なり。

第五節 天父の喜悅

吾人は天父を離るゝを哀む、されども天父の之を哀み給ふ事は更に

大なり。吾人天父と偕にあるを樂む、されども天父の之を樂み給ふ事は尙更に深し。

先年予が幼女大患に罹りて生命旦夕に迫り、醫師も手を離したり。予は其側にあり、孤燈の下、消然として坐し、病兒の憔悴したる顔色を凝視めつゝ、百感交々至りて胸張裂く計なりき。幼女は生て漸く一年有餘なれば、親たる手に別れ逝くを何とも思はざるべし。されども予には實に斷腸の念ありき。あゝ予は最早彼の手をとりて互に戯るる能はず、彼の小さき口より「おとつちやん」どの聲を聞く能はざるを思へば、予自らの手を切られ、足を挽がるるよりも苦しかりき、彼は實に無力無能、東西をさへ辨せざるものなれども、予にとりては彼なくば満足なく、平安なく、喜悅なきなり。彼遂に永眠したりし後、妻は予に語りて曰く「私は彼と偕に山中に住まん事を欲す」と言ひ終りて、落涙潸然たりき。

嗚呼親にとりては其子の如何に幼く如何に無力なりとも、憐にあるによりて喜悅あり。此の如く吾人は天父の子なれども罪惡に溺れ汚穢に染み、罪の爲に天父に離れたるも、さのみ苦痛を感ぜざるべし。されども天父は之が爲に苦痛を感じ給ふ事幾許ぞや。吾人は無智無力、不徳なるも天父は吾人なくば満足なく、平安なく、喜悅なきなり。然り、吾人の如きものも天父と偕にあらば天父は無上の歡樂となし、最上の喜悅となし給ふ、あゝ吾人の光榮何ぞ之に過ぎん。然り、天父の此情愛こそ吾人が神と合一する第五の活力なれ。

第六節 主イエス、キリストの功にあり

神人合一の道を解したりとて吾人未だ神との合一を全したりと云ふべからず。吾人は神人合一の實例を見、是を成就するの力を受けん

事を望む。イエスが地上に於ける生涯は之が爲に益あり、歴史上のキリストは之が爲に價値あり。又復生のキリストは其力内住のキリストは其生命なり。

キリストが天父に愛せられ給ひしを知るによりて吾人も亦天父に愛せらるるを知り、キリスト天父に事へ給ひし事績を見て、吾人も亦如何にして天父に事ふべきかをしる。キリストは實に吾人の救主なり、指導者なり。

第一項 彼が天父に愛せらるるを知しにより

キリストが洗禮のヨハネにより洗禮を受け給ひし時、天より聲ありていふ、なんぢは我が愛子わが悦ぶ所のものなり。馬可一〇十一、馬太三〇十七、路加三〇二二と、又ホルモンの山に登り給ひしに際し、聲雲より

出で、此は我旨に適ふわが愛子なり馬太十七〇五馬可九〇七路加九
〇三五と。然りこの聲はヨルダン河中とホルモン山上に於てのみに
あらずして、其全生涯を貫て恒に聴き給ひたる天父の聲なり。キリス
トは自ら天父の旨に適ふ愛子たることを知り給へり。

キリストは清く吾人は汚れ、キリストは高く吾人は低く、キリストは
完く吾人は瑕に満つ、故に吾人はキリストの如く天父の旨に適ひたる
ものにあらず。されども天父は吾人の如きものを尙其愛子とし、恒
に爾は我愛子なりと呼び給ふ。吾人が天父の愛子たるを知り得たる
はイエスが其愛子たるを知り給ひしによりてなり。これイエスの意
識なるが故に又吾人の意識となれり。これキリストの賜物なり。

昔時肉を以て此地上に現れたりしキリストは、今靈を以て吾人と偕
にあり、吾人の衷に住みて力となり、生命となり給ふ。然り天父の愛子

たるキリスト、吾人の内心に在すにより、吾人は神と合一するを得る也。

第二項 彼が神に順ひたりしにより

イエス、キリストは天父の愛を知り給ひしのみならず、恒に天父に順
ひ、人道の如何なるものなるかを明示し給へり。

イエス嘗て其母に對ひ、我は我父の事を務むべきを知らざる乎路加二
〇四九と曰ひ、また我を遣し、者の旨に遵ひ其工を成畢るを其糧約四
〇三四といひ、子は我父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行ふこと
能はず約五〇十九と語られたるは、専ら天父に順ひて其生涯を送られし
ことを示すなり。彼は時々天父に順ひしにあらず、其全生涯天父に順
ひ給ひたり。實にキリストの本性は天父に従順なる所に其特質存し
たり。

キリストは天父に従順なる生涯を以て吾人に好き模範を示し給ひしのみならず、其性を以て吾人の心に宿り、吾人の生命となり給ふ。故に吾人はキリストの力によりて神に順ひ神と合一し得るなり。

第三項 彼の祈禱により

イエスは天父の前に病者、死者、貧者の爲に祈り給へり。而して其祈禱は天父必ず之を聴き納れ給へり。

キリストは吾人の爲に何を祈り給ふや、曰く「我ただ彼等の爲にのみ祈らず、彼等の救に因て我を信する者の爲にも祈なり。此はみな一にたらん爲なり。父よ爾われに在われ亦爾に在かくの如く彼等も我儕に在りて一にならん爲」(約十七〇二十、二一)なりと、イエス、キリストは實に吾人が神と一にならん爲に熱心祈り給へり。吾人が祈禱を神聴き給ふ

とすれば、況んや其獨子キリストの祈禱に於てをや。殊に此主旨は天父自ら大に欲し、切に求め、深く喜び給ふ事なるをや。キリスト自ら吾人が神と合一する爲に祈り給ふ、されば此一事の成就せざる事は決してなかるべし。吾人は實にキリストの祈禱によりて神と合一す。

第七節 結尾

吾人は此世の權位、富學、名譽等を求む、されども神は其根本なる貴き力を與へんとなし給ふ。吾人は神の賜物を得んとし、神は自己を與へんと望み給ふ。然り神は自ら吾人に來り、吾人と合一せん事を切望し給ふなり。

神吾人に權を與へ給ふは、自ら吾人と合一せん爲なり、之を奪ひ給ふも同じく其目的の爲なり。神は吾人と合一せん爲に、富を與へ、或は貧

を興へ。名譽を賜はり或は不名譽を賜はり。親を興へ或は此を取り。子を賜はり或は此を喪はしめ。生を授け或は死を授け給ふなり。而して吾人も新婦の新郎を戀ひ幼兒の乳房を慕ふよりも尙切に神を慕ひ神と合一せん事を望む。吾人が苦樂を忍ぶは之が爲のみ難易に甘んずるも之が爲のみ。已に神天より之を欲し、大地より之を望み、天地の合致あり、神人の大引力あり、何を神人合一の成就せざる事やある。人或は親友と一致する能はず、親と一致する能はず、妻子と一致する能はざることもあらん。されども吾人が父なる神と一致和合する事は疑ふべからず。よしや天體は烟の如く去り、地塊は沫の如く消ゆるとも此一事は必ず成就するなり。何となれば吾人は元來神と合一する様に造られたるものなればなり。已に神と合一したる人々よ。今後彌々神の愛を味ひ神を喜び神を

樂み神に順ひ神に事へ、全心全靈を捧げて其の合一を全くせよ。尙未だ神と合一せざるの人々よ。諸君の胸裏に不平あり、不満あり、感謝心奥に湧かず、喜悦内心に溢れざるものあらば、諸君は宜しく耳を敬て、聞くべし。神は我戸の外に立て叩もし我聲を聞て戸を開く者あらば我其人の所に就ん而して我はその人と偕に其人は我と偕に食せん(黙示三〇二十)と呼び給ふの聲頻なるを。而して諸君の衷情には神を欲するの切なる要求あるを顧み、私心私慾を棄て、翻然心を新にして神と合一せよ。かくして吾人は皆偕に人生の歸趣を全くするを得ん。

神人合一終

明治三十九年十月十日發行
明治三十九年十月十日發行



著者 原 忠 美
播磨國明石郡明石町ノ内大明石村弓町

發行者 福 永 文 之 助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 菅 間 德 次 郎
神戸市葺合町二千〇四十六番屋敷

發行所 警 醒 社 書 店
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

神戸市元町一丁目二十四番屋敷

印刷所 福音印刷 神戸支店
合資會社

復製 不許

原 忠 美君著
●恩 惠 錄

定價 二十五錢
 郵稅 四 錢

著者病瘳にありて、仰で、神之恩惠の感謝に堪へざるものあり、俯して、此世の人の尙ほ真正の人たるに至らざる遠きを慨し、此著をなして以て、如何にして神之恩惠を感じ得べきか、如何にして吾人は品格高き人、真正の人となり得るかの大問題を解釋せんと試みたるもの、其病中筆を呵したるが故に、殊に眞面目なるを見る

●最新刊書目次

- 札幌農學校校長農學博士佐藤昌介先生序
 札幌農學校カメライ會著
- 二宮翁研究 定價 四十 錢
 ビームス、オーア博士著、植村正久君編輯主任
 田中達君譯(神學叢書第二卷)
- 基督教世界觀 定價 一圓三十 錢
 小包 十 五 錢
 同志社神學校教頭ラル子博士著 大宮季貞君筆錄
- 新約聖書 定價 十 錢
 聖書 羅馬書講解 郵稅 十 錢
 酒井勝軍君著
- 讚 美 論 定價 十五 錢
 郵稅 四 錢
 大隈伯序、島田三郎君序、松村介石君序、伊澤修二君序
 酒井勝軍君著
- 教育と音樂 定價 三十五 錢
 郵稅 四 錢
 河上 清君編
- 原文英譯詩歌集 定價 二十五 錢
 郵稅 四 錢
 對照
- 山路愛山君著
 ●基督教評論(現代日本教會史論) 定價 五十 錢
 郵稅 六 錢
 中村春雨君著
- 人 の 母 定價 五十 錢
 郵稅 六 錢
 湯谷健二郎君編
- 日 曜 唱 歌 定價 二十 錢
 郵稅 二 錢
 ビ、デー、デピス博士著
- 神學之大原理(訂正版) 定價 一圓三十 錢
 小包 十 五 錢
 留岡幸助君編
- 二宮翁と諸家 定價 三十五 錢
 郵稅 四 錢
 シドニー、ギユリキ編
- 舊新約聖書對讀文 定價 四十 錢
 郵稅 四 錢
 天源居士著
- 思想の日本 定價 三十 錢
 郵稅 四 錢

●明治四吾家の歴史

定價三十五圓
郵税六圓

理學博士松村松年君著

●日本千虫圖解第三

定價十五圓
小包十五圓

豐崎善之助君著

●社會主義批評

定價三十五圓
郵税四圓

理學博士松村松年君著

●日本昆虫分類學

近刊

石川中山君著

●露國の志士

近刊

阿部清藏君著

●馬太傳講義

近刊

宮川經輝君著

●約翰傳講義

近刊

宮川經輝君著

●靈界の妙趣(訂正)

近刊

ラレキテ博士著

●教會歴史(訂正)

近刊

米國コロンビア大學教授博士ヤンクス著

醫學社書店出版部
元田作之進君校

●社會學

近刊

德富健次郎君著

●巡禮紀行

近刊

此れ著者の順禮土産也、著者今春思立つ由ありて飄然順禮の途に上リバレンスタインの聖地に基督の昔を偲び露西亞に巨人トルストイ翁を訪ふて歸りぬ。百二十日舟車六千餘里の行程、境に觸れて興を起し人に接して感を生ず。歸來筆を取りて茲に本書を成しぬ。巻中多く著者の携へ歸れる寫眞版を挿む、本文と相待つて一讀者と共に西亞東歐を旅するの興あらんか。

ゼ、ア、ア、博士著

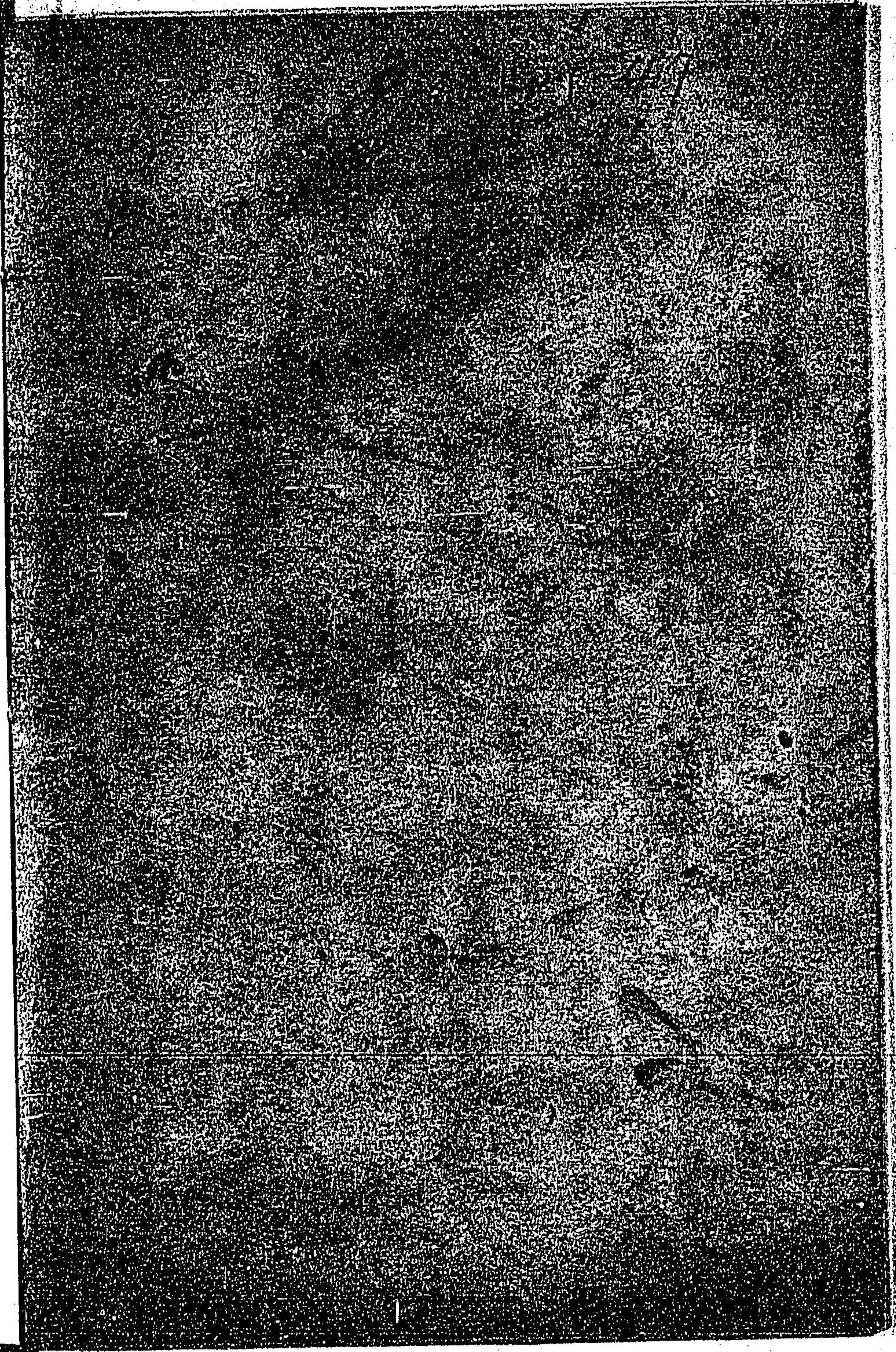
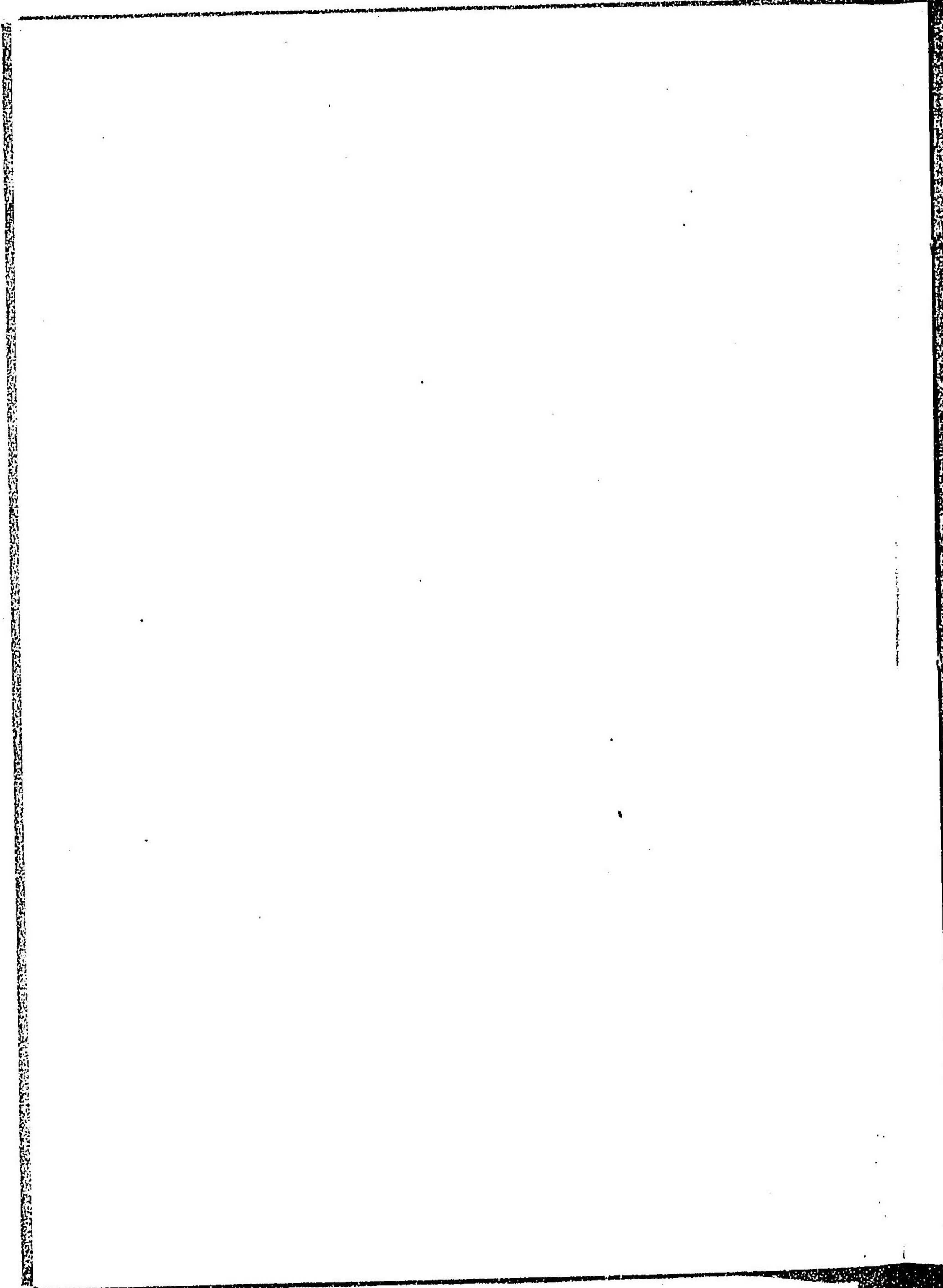
●基督教靈的活動

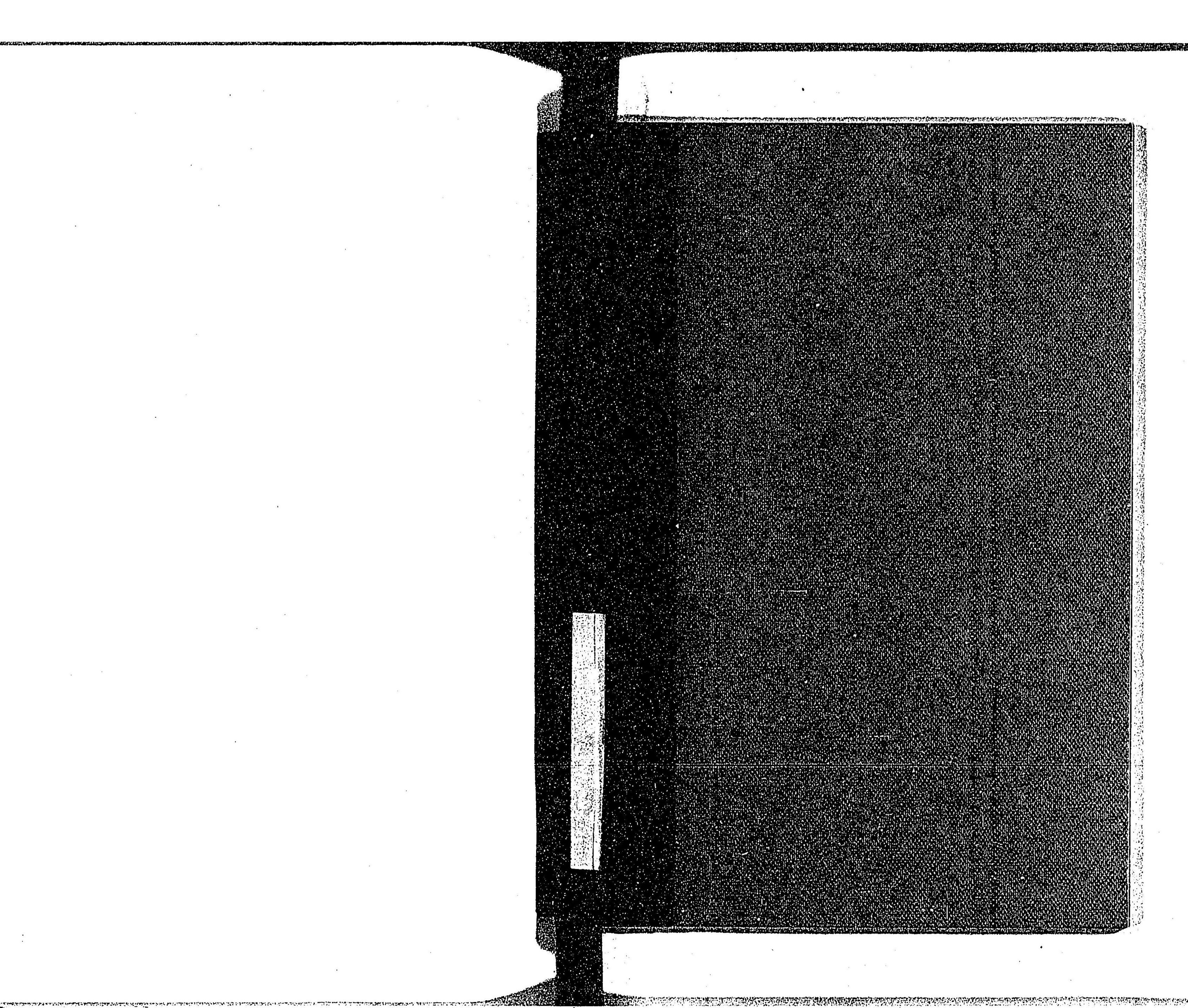
近刊

座古愛子著

●伏屋の曙

近刊





特 21
364

020812-000-6

特 21-364

神人合一

原 忠美 / 著

M39

ABI-0638

